

私の一冊

社会福祉学科 濱口晋 先生

糸賀一雄著 『福祉の思想』

小鹿図書館 : 369/I 89 (NHK ブックス 67)

『この子らを世の光に』

人生で、私は、8回もの引越しを経験している。引越しという「大混乱」の中においても、紛失せず、また、自ら手放さず、持ち続けている一冊の本があった。その本こそが、今回紹介する「私の一冊」である。私とこの本はもうすでに 17 年も同居しており、今や我が家の誰よりも私と長く一緒に暮らしている。私の元にやってきたのは、1990 年であった。当時、私は学生で、心身障害児教育を学んでいた。講義、実習、ボランティア等で、障害児教育・障害者福祉の実際に触れ始めた頃であったが、すぐに、最重度の重複障害児の教育・発達・福祉の難しさを痛感し、私に何ができるであろうか、彼らの生きることの意味等について、悩み始めていた頃でもあった。

冒頭の言葉、『この子らを世の光に』は、知的障害児(福祉)の父といわれ続ける糸賀一雄(1914-1968)が、最期に、残した言葉である。そう、最期に、である...

糸賀一雄は、1946 年、終戦後の混乱期に知的障害児施設「近江学園」を創設した。その後、重症心身障害児施設「びわこ学園」など多くの施設を創設していった。知的障害児の福祉・教育の先駆者として、その実践と研究を精力的に行い、20 世紀の福祉実践家として著名な人物である。

我が家の『福祉の思想』を久しぶりに、手にしてみた。本を開けると、正直、「汚さ」に驚いた。「汚い」というのは、鉛筆で、乱雑に線を引いている箇所がたくさんあったからである。なかには、何度も何度も上から塗り重ね、真っ黒になっている箇所があった。何度も読んだ部分であるはずだが、一本一本の線をいつ引いたのかは残念ながら記憶にない。その部分を長くなるが引用したい。

「この世の役に立ちそうもない重度や重症の子どもたちも、ひとりひとりかけがえのない生命をもっている存在であって、この子の生命はほんとうに大切なものだということであった。『人間』という抽象的な概念でなく、『この子』という生きた生命、個性のあるこの子の

生きる姿のなかに共感や共鳴を感じずようになるのである。

ちょっと見れば生ける屍のようだとも思える重症心身障害のこの子が、ただ無為に生きているのではなく、生き抜こうとする必死の意欲をもち、自分なりの精いっぱい努力を注いで生活しているという事実を知るに及んで、私たちは、いままでその子の生活の奥底を見ることのできなかつた自分たちを恥ずかしく思うのであった。この事実を見ることのできなかつた私たちの眼が重症であったのである。

脳性小児麻痺で寝たままの十五歳の男の子が、日に何回もおしめをとりかえてもらうおしめ交換のときに、その子が全力をふりしぼって、腰を少しでも浮かそうとしている努力が、保母の手につたわった。保母はハツとして、瞬間、改めて自分の仕事の重大さに気づかされたという。」P.174-175

「この子らはどんなに重い障害をもっている、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも、立派な生産者であるということ、認めあえる社会をつくろうということである。『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである。・・・三歳の精神発達でとまっているように見えるひとも、その三歳という発達段階の中身が無限に豊かに充実していく生きかたがあると思う。生涯かかっても、その三歳を充実させていく値打ちがじゅうぶんにあると思う。そういうことが可能になるような制度や体制や技術をととのえなければならぬ。」P.177

最初に読んだ時、糸賀氏のお話を実際に聞いてみたい、と思った。が、彼は、すでに 1968 (昭和 43) 年 9 月にお亡くなりになられていた。この著作が出版された 7 ヶ月後であった。偶然、私も 1968 年 6 月生まれであり、自分としては驚いた。20 年以上前にすでにこのような考えを提唱していたことにさらに驚いた。糸賀の功績は、軽度だけでなく、重度・重症の知的障害児も含めて彼らを、それまでの哀れみ・保護・恩恵の対象としてではなく自発的に生きる主体として、知的障害者観を転換させた点であると言われている。しかし、このように一言で済ませられないほどのもっと深い意味があったであろう。

21 世紀になって、知的障害者福祉だけでなく、他の障害児(者)介護福祉、高齢者介護福祉の制度等は、当時と比べ整ってきてはいる。彼の思想に基づく福祉社会は、未だなお十分に実現されていないように感じる。糸賀の没後まもなく 40 年が経つが、その実践から得た福祉

思想は決して色あせておらず、21世紀は、このような思想を基盤にしたうえで、さらによりよく発展させた社会でなければならない。今後、私自身も実現できるよう努力していきたい。そして「私の一冊」は我が家の家族の大切な「一人」として、これからも共に歩んでいきたいと思っている。

なお、原文には、半世紀近い前の時代背景等もあって、現在使われていない、知的障害を指し示す当時の用語がそのまま語られている点もあるが、興味を抱いた方は、糸賀一雄の著作を是非一読していただきたい。そして彼の福祉思想に実際に触れ、知的障害者福祉だけでなく、21世紀の社会の福祉について一人ひとりが考えていってくださることを願う。それが糸賀の願いでもあろう。

糸賀の最期の講演(1968年9月17日)の記録(「愛と共感の教育」柏樹新 1972)より

「…病身をおしての講義であったのだが、糸賀氏はその壇上で意識を失って昏倒されながら、なお持っているマイクから手をはなさず『このことだけは…』と、『この子らを世の光に、この子らを…』と呂律のまわらない声で訴えつづけてようとしていた。」

施設職員を対象とした研修会の壇上で、糸賀は、心筋梗塞のため倒れた。翌 18 日没す。享年 54 歳であった…